

人口史料が語る「生きることと幸せ」？！

～ 究極のパネルデータに見る前近代庶民のライフコース ～

*Can micro-historical data tell us about “life and happiness”
of commoners in early modern Japan?*

黒須 里美 (麗澤大学)

Satomi Kurosu (Reitaku University)

e-mail: skurosu@reitaku-u.ac.jp

はじめに

本報告は「生きることと幸せ」という本シンポジウムの視点から、これまでの長期マイクロデータを利用した研究成果を見直してみようという試みである。近年、歴史人口学の分野では、情報技術の発達によって、世界的にマイクロデータの構築とそれを用いた新しい視点の分析が進んでいる。その分析の先駆的成果として、報告者の関わったユーラシアプロジェクト (以下 EAP) は、長期に続く個人レベルのデータと共通のモデルを利用することで、近代化以前の社会 (農業社会) を研究対象とした 5 カ国 (日本、中国、イタリア、ベルギー、スウェーデン) にまたがる 7 つのコミュニティにおける死亡、出生、結婚の分析を行った (*Eurasia Population and Family History Series*, MIT Press)。この中でも人別改帳を利用した日本のデータの詳細は突出していた。究極のパネルデータともいえる徳川期のマイクロ人口史料は、貴重な社会科学の実験材料となりうる。本報告は EAP における日本の研究の成果を他社会との比較を交えながら確認し、新たな分析を加えながら、徳川庶民のライフコースに迫る。

歴史人口学で見る「幸福」？！

前近代における庶民の「幸福」を語ることは可能だろうか。本研究のカバーする 18-19 世紀は Pax Tokugawana (徳川の平和) と呼ばれる、250 年以上に及ぶ世界史でもまれな時代である。戦国時代と比べれば、平和で安定し、文化が栄えた時代と捉えることはできる。しかし、人口の変化から見れば、まだ飢饉、疫病、天候の不順による凶作などに人々のライフコースは大きく左右されていた時代でもある。EAP が対象とした二本松藩 (現在の福島県に位置した) の農村(1716-1870 年)では 1-4 歳時の平均余命が 42 年ほどしかなかった。

死亡率の高かった時代とは言え、家族との繋がり方が現代と大きく違ったわけではない。太田(2018)は浮世絵の中の母子絵に着目し、そこに母親の優しさ、たくましさ、知的な一面、そして子どもの好奇心への共感を見出し、共感的な養育と教育がなされていたとしている。また、ボライソ(Bolitho 2003)は近世庶民の近親者との死別を経験した庶民 3 人の体験 (子ども死を悼む僧侶、父親の病を看取った歌人、病に苦しむ妻の闘いを見守った学者) を記した文書から、その近親者の死の衝撃とそれを乗り越える辛さを描き出した。現在よりも近親者の死の体験が身近なものであったとはいえ、人々がそれについて無関心で

あったわけではない。死が身近なものであったとしても近親者の死は耐え難く、それほど家族の情緒的繋がりがあったということを示した。また、成松（1992: 78-79）によると、二本松藩の一農村の名主を務めた水山家の文書には、文政 2 年（1819 年）の「八拾歳已上長寿之者記上帳」が残っており、92 歳の権左衛門他 7 名が記帳されている。またこの村では 90 歳になると「綿入一ツ、五升入米一俵」を藩より賜うことができ、実際に権左衛門についてもこの通り実施されたことを確認している。これらの研究は、子どもを持つ・育てることや親子・夫婦関係、また「長寿」が大切にされていた、また理想とされていたことを示唆している。

長寿と同じように大切にされたのが家の永続性ではないか。平井（2008）によると、その家とは、①世代をこえて永続するもの、②家業・家産を維持するもの、③単独相続されるもの、④直系家族世帯を希求するものである。そしてこの家の特徴は 18 世紀前半から 19 世紀前半に庶民社会に一般化していったとされる（大竹 1982、平井 2008）。近世社会の課税法は村請制であり、村を単位として年貢を担っていたため、村が税を割り当てる本百姓世帯の継続は村の最大の関心事でもあった。それゆえに年貢を担うべき一家が欠落（届出なく移出）するようなことがあれば、親族または五人組が捜索する責任を負った。このような家を村の単位とする行政システムの存在や、市場経済化の進展による家産観念や継承意識の強化（長谷川他 1992、大藤 1996）、さらには家を単位とする宗門改帳など改の強化（平井 2008）などが家の定着の背景にあったとされる。しかし、生存子がいない、また親世代がいないなど、直系家族を営むためのいわゆる同居可能率は低く、人口学的制約は大きかった。そのような中で、庶民はどんな戦略を展開して生き抜いたのか、また家を守ったのか。

このように見てくると、子どもを持つこと（出生）、夫・妻を持つこと（結婚）、生き続けること（寿命）、そして世帯の継続性という人口学的指標が、徳川庶民の生きかたとともに幸せのあり方を間接的に示していると捉えることができよう。報告では、まず、結婚や出生、世帯の属性がどのように人々の生存確率に関わっていたかを議論する。次にそれらの理想のかたちにどんな属性を持った人々が近かったのかという視点で、男女、出生順位、世帯の中の位置、階層差などが、結婚、出生、死亡といった幸福に影響を与える要素にどう関係したかを EAP の成果を踏まえて分析する。さらに理想が達せられない場合に徳川庶民はどんな戦略を用意していたのか考察する。以下ではその一例として結婚をあげる。

結婚というイベント

前近代の日本において、結婚は個人のサバイバルと世帯また村の存続のために重要な機能を持っていた。EAP の 5 カ国 7 地域の女性の年齢別未婚率のパターンを見ると、日本と中国は明らかに早婚、かつ年齢的に集中しており、皆婚社会であったことが明らかである。男性についても同じ傾向があるが、中国はこの当時から性比が異常に高く、男性過多でヨーロッパの地域に近かった。誰もが一度は結婚する「皆婚」傾向は、同時代日本の他地域でも同様である。このような皆婚社会において結婚適齢期をとうに過ぎた女子が未婚であった数例を見ると、「煩い」や「疾病」という記載が目につき、健康体でない女子であることが明らかになった。また、当時の慣例を集めた『民事慣例類集』の婚姻の項目によると、

一般的に持参金がないという慣習であるが、例外として、身体障害者か顔つきが良くない場合の「償い料」として100人に1人、「持参田畑」があったとされる(湯沢 2001:52)。EAPの成果はこれを統計的に支持する。二本松藩の2農村のイベントヒストリー分析で、地域経済、世帯状況、個人の属性をコントロールした上でも、有配偶女子と比べて、未婚女子は死亡確率が2倍も高かった(Tsuya and Kurosu 2004)。これは明らかに選択性の問題で、健常者以外は未婚に留まらなくてはならず、そのような未婚の女子の死亡率が高かったのである。

ではその結婚(初婚)であるが、EAPの比較を見ると(Lundh, Kurosu, et al 2014)単純世帯のヨーロッパ地域は結婚によって世帯が形成されるスタイルで、晩婚と非婚の多さが特徴であり、一方直系または拡大家族世帯の東アジアは結婚と同時に夫婦は親世帯に組み込まれ、明らかに早婚・皆婚であった。しかし、そのどちらにおいても、充実した福祉制度が発達していない社会において、結婚は重要な機能を持っていた。イベントヒストリー分析の結果によると、経済状況が悪ければ結婚が遅れ、世帯の社会経済的地位が低くても結婚が遅れる。また、どこの社会でも男性より女性の結婚確率は高いが、ヨーロッパではきょうだい数が多いと、また東アジアでは出生順位が高いほど結婚確率が低くなった。初婚年齢と生涯未婚率が大きく違うヨーロッパと東アジアであるが、結婚のタイミングを見ると、地域の経済、世帯の地位、そして同居家族、ジェンダー、きょうだいによって大きく影響を受けていたという類似性が明らかである。

<参考文献>

- 大竹秀男 1982『封建社会の農民家族(改定版)』創文社
大藤修 1996『近世農民と家・村・国家』吉川弘文館
太田素子 2018 「『子宝と子返し』その後～近世農村の子育て／その光と影」第69回歴史人口学セミナー 3月7日 麗澤大学・東京研究センター
成松佐恵子 1992『近世東北農村の人びと 奥州安積郡下守屋村』ミネルヴァ書房
平井晶子 2008『日本の家族とライフコース―「家」生成の歴史社会学』ミネルヴァ書房
湯沢雍彦 2005『明治の結婚 明治の離婚 家庭内ジェンダーの原点』角川学芸出版
Bolitho, Harold 2003 *Bereavement and Consolation: Testimonies from Tokugawa Japan* (Yale Univ. Press)
Lundh, Christer, Satomi Kurosu et al. *Similarity in Difference: Marriage in Europe and Asia, 1700-1900*. Cambridge, MA: The MIT Press.
Tsuya, Noriko O. and Satomi Kurosu “Mortality and Household in Two Ou Villages, 1716-1870,” pp.253-292 in Bengtsson, T., C. Campbell, J.Z. Lee et al. *Life under Pressure: Mortality and Living Standard in Europe and Asia 1700-1900*. Cambridge, MA: The MIT Press.

※本報告は、文部科学省私立大学戦略的研究基盤形成支援事業「人口・経済・家族の長期的研究：多世代パネルデータベース構築」(H27-31)(代表 黒須里美)及び科研費「東アジアにおける歴史人口データベースを利用した人口・家族の比較研究」(H27-H30)(代表 黒須里美)の助成を受けて行われたものである。